澤札
中村俊定文庫
文庫 18
765
2

信濃札集

春

士朗居士

慶應義塾

俊定藏

浅山の風日に出来て梅の花
異咲く梅折ぬ日は春の月
まもれども見れさらぬ枝と雪
旅人よ雪を踏れとも春は空
梢外はいつもの鶯や春は雪
言取を先人の春は山陰

時かしてゝ雲井にとゞまりぬ
仰ぎてやらゝひすゝ時ぬ雲井
山里い あらゝひすゝ乃日部
花ゆやさゝてゝ仏をみるゝ
まゝ柳乃ゆやあゝさの道岩里
羽ゝ乃ゆゝ角も生へ猫の恋
是やゝ乃ゆくもこゝ屋も猫の恋
一木乃まゝ焼ゝ河原こゝ

まゝ乃ゆゝ市や都乃山のふり
大仏乃ゆゝを尺ゝ行まゝ辺ゝ
あゝゝ似ぬ人をゝ恋の絵ゝ
返ゝ来て時ゝ焼物きゝ乃ゆゝ
すゝゝ乃ゆゝ人形をこゝ
ゝとくゝと名歌乃ゆゝ
松さゝゝ一木亞ゝ
咲みゝて ゝも つゝ

ちつきたなくて門出る樵の郎
問ふきい花盗人の声呂の郎
花樵くと人と騒く独りこの声
美七日ものも喰さぬ嵐山家北宿

再嵐山家ゑ樵ひて

淋しさとりあつめ花おもへ幕のこゑ
むのあたむきひとる菴もこの軍
年くゑ花のえやこの暮りゑ案

こゑりき菴や樵ゑ寂ゑ
吾都ゑ去くく樵の声北嵐
義ゑて花乃いさよ夕ヒの雪
よ聖ゑて
世を捨年 歩行樵の山路
義とゑ歌みて
小く義 花こゑてねよ雪山

出代や鼓波の芦を片ん
今焼ける花の赤を刻み孫ん係
蛇の寿命のその花の咲日なる
ちりなれ赤を去り迄波　蛭の寿
人もふへ蛭もふへて山家に
笠寺や蛭時赤の湯もしん
山吹の暮恋こあて時このた
因あり任寿も　紙の情ふる

たる年を待ける因螺の任任君

音光寺

加ふ〳〵風　掃部山出雲
茶ぬ茶や海の子より貧乏
氣目ふる目鼻も見ぬ鉢
若別ふるもの光ふ地上まれより
宗盤年遠ふる赤あり臨赤
まれ取い人乃別　陸ふたう

伏見にて日くれかくれに来りし桜の花
川波や霞ゝぬる夜の桜の花
桜一さかり 添の石仏の姿
心の井より汲知る夏の名残の郭
春を惜む夏の見たり世の
うらみすて 楽より時雨も来り
ゆくまゝに 物も知る 波来る雲

夏

山くらき 雲 雨ふりこゝろもの
をもゝ 白 白 猿 ア ぬ 杜若
卯花 白 も 白 て 垣 中 男 の
若 生 ぬ ゝ や 高 時 ぬ 落 ち ぬ
笑 笑 て 山 高 ゝ ハ ゝ 死 寂 れ
あ ふ 坂 や 川 雲 て こ き 葉 ゝ 笑
戸 の 破 て 蛙 ゝ 来 の 寂 れ 弟 の

こけのそやまゝ西立天いそ地蔵
百合咲くかこち良るゆ
みゝう秋を先こ音月の夢うゝ
白ゝに霧ふ風もなきゝ小あ弘
植ゝ去山里を 浦の遠ゝ
世植る日も人の来て眠りり
坂遠火や田立の陰ゝ月も時
寒ゝる 時やきめゝの家の雨

かんこゝる 時やや枯木の二所
淋しさの中ゝ地あり かんこゝる
ゝ吸もゝ 初室や 陰ゝまに
頭ゝくゝいつも月 秋の部云
金屏の 梅ゝこゝり 陰ゝ表
部云 思ひ 抜ても 月 秋ゝ南
ゆに山ゝ 月ゝ三ゝもあれ 行ゝ
天 遠 月の白ゝ 五 義 競ゝ山

嶋さんいくらもほとく鶴ハ
ぬ[illegible]を 柱にゝ[illegible]ちまきハ
鶴の舞を消〳〵 も良ゝ竹の一ツ
うき藻引〳〵 池 一隅乃 動ハ
五月雨の伊勢を流 あき 夕の雲
さゝれ[illegible]やめを 船 招ク鳥ハ
五月雨や 彩より高 あやめ草
雨 京や 舟をたよりに 泥ほ[illegible]る

水 [illegible]を きの[illegible]ゝ [illegible]れ 泥ほ[illegible]る
時 雨あい 水 鶴 [illegible]く 楽ちゝ[illegible]と
保乃 [illegible] 日や 夕 良の 一三 [illegible]
中 [illegible]や 杖を [illegible] 光の 枝
雨 [illegible]の [illegible] [illegible] 雲 解
年 寄の 多さよ 本 [illegible] 光 [illegible]
鶴 [illegible] 涼 [illegible] 味も [illegible]
[illegible] 家に 来 [illegible] 五月 雨

剃さへ雪まさりける老の月
垣根に撥ハ蟬時雨ふる
ゆふぐれや蛍を焚る草の露
夕たちや竹一切の動きより
あけぼのゝ雲きく西の蓮の部
を移る月のうるさよ蓮の中

秋

たゝ牧の庵ゝつまてる葛ふる
たゝ牧の河霧ふる山の雲ふる
牧ゝ人ゝ孫と小野の夏
家を吹きへ桐の一葉ふる
菴のへ拾ひ入れり桐一葉
牧の庵ゝ桐の葉ふる
蕭や口ゝ小車の荷の上
天の川乗ゝ乗ゝ乗ゝ

せきゆる雲の四うよ天の川
信濃の薄をかるる面影
姥捨の池なのうち 模 二の邪
松ゝ寒いそやゝ雲も多の月
高直いおさ一日の日も暮ぬ
十日 姥捨 吟 義て 移 の 寒
うれしとも見ゆ萩の寒
虹の根や雲行きの義の寒

湖の水の低さよ 鴨 り 舞
萩 蘇 のんを 強 虫 の 寒

塾 因 みて

代神のんを尺よや 移 の 義
菴の 五 や 夏 を 虫 の 歩 行 者
きりゝ 所 時 や いかまて 秋 の 義
移 まゝ 秋 代 く 淀 の 焼 山
移 の 影 き 元 て あ ゝ と 淀 移 移

雁のなき渡る空 田うゑ
三日月は雲 ほのぐらきよ 二日月
三日月い何 まんなかの 月
松陰のそら月 ひとりみる
高原世界 山の上より 月
降ゐいも 海原むこう 月の雲
冷々と 月は高 ある 雲
物あはれも 艶 菜畑 月

頃ヶ 篠 煙 物 月の色
燈乃 秋い 明 も 望 月雲
梅 の 田 三人 月 月
伽 人い 月 頃ヶの 秋
情 冷 の 十年 月 枯 枝 の
月 雲 芝 月に の 家
月 嶽 人 艶 の 事
月と日の間年 澄り 富士の 山

秋の雨さ山の奥なる塔ノ峯
寂しさの塔に住まる雨さえ
山名も自ら金ぶん初紅葉
おりしろき人のあるく事ぶり

伊勢にて

山金の藤と松と金ノ露
小松吹伊賀さ姫の夕の雨
日光堂ぬ日さ降る蛾の音

奥さ鯛人の語者よ菊の花
蕗ノ菊も仏ぬ菴の垣
ひさ津よ別い光ぬ菊の花

岐阜山にて

そやとて法華経を琴の松
行ぬ中も行い庵の春
門たてる行人も門ノ農の春

五十嵐川

麻の網みもすそ川澄み
渡る秋同じ面の波の音
鶏こくや荊や田に焚夕煙
枯て久しき松こそ見れ秋の心

冬

冴ぬさいたる冬三日の月
時雨ぬ冬初霜の後の秋

あらくまの細い冬の日の
冬の日の戸を押開る杉葉に
弩鴨の時ハ枯れ芦迄に
鴨の脊ハ紅葉する岩ぬ
湖を鴨て切る秋哉 ウ東
宇治ハ冬あり細代ハ秋る思ひ
橋柱ハ火ハかゝれ細代も
老法ら人や枯野の冬の経

枯れや世をうしとて出家の人
出家する僧や枯野の一ツ哉
萩の中も一木あり高き撫
哀やとの下秋ふかきあり高き撫
名ばかり西向きし小哉の事
程ちぬ分や高き見て松の色
無れ言あり会る陰る撫すぐ
哀なる慰む撫のあるうの事

志ほのうみてさ永る小舟の事
昼なきあり海を哀の子鳥
ふあくき一条二条や名木立
名ホ立 洲の志ほ山志ほ福も
きりぎりすと云ふむ名の月取引
出る月を見ると事是名の菴
月あまい人も住なり名の山
閑と九ふ名の月

絶まて雪降出る冬の月
さゆ〳〵と降あく空や冬の月
寒月を寒き雨と松の風
思ひ出や冬初雪の玲瓏山
松竹やあしい雪を埋て
さいつても雪い降る奥山哉
大雪の朝踏を開る山路哉
人〳〵の寒も疎し松の雪

降雪の三年寄いつも風狂
月雪や竹ちゝめ付ふり肩
月雪の是も昊なり枯むら
竹年のこゝろとやぬ山哉

雑

うもれ〳〵り祭不老の山
任ひひて かゝこき竹の林哉

大空より隈なきし鶴の齢かな
鶴鳴やかくてうろうろと船の浦

向ふ行船の高さよ冬吉鳥　尾張　岳輅
木枯や菜の葉よ白む鴨の足　騏六

志やるくと紫の明行を枯るゝ　魚堂
行樹て枯る木深くあるゝ　方明
三日月やゆく秋の中を一点星　五雄
雲早き月よ立ゝり枯尾花　麦阿
かくこまとりよ恋きき柳の白しい　大阜
家と花よ立ゝ行秋よゆく夜　竹汝
樗樹や赤き紀すゝまおくゝ　伊勢　椿堂
牛牽よの流よ立ゝ今秋の秋　有吾

草枕戸やゆしよ月のかすめき　野渡
井戸や人の蓋する朝の蛍　六車
木枯の吹やうて星の光り　布川
寒て孤月秋末寒の山路　ひとを
蓋板戸やゆしよ月の糸　雲与
蟲吹て寒くしまる松穀堆　丘高
冷電い南向あり花すゝ絡　尾張　平砂
秋風や寺へ入ぬ山の奥　大蘇

仲間う流ぬ風吹り萩の花　帯梅
雲の北の北かゝ所夕アのさいこと　野雀
寒や面や行人柳の花　硯静
ふに所や高良のふるの墓賣　得芝
峯ゝ雲寒や行来の鄙志　由肆
旅人ゝ高のかゝる野路の京　伊勢　南泉
松風の寒空を尺よまの原　推巳
寒帝ゝ桐の木持て蛙ゝ　滄波

三月や光線日の山さえら　霍鳴

花ゆゑ日毎年老寿日数の家　尾張　竹有

太秦や屋造出屋の　面　橘良

雲北斗奥北さハ吹き　小の上　逸人

逃る芦ハ拾ふ　今　旅の　重　立道

仏植ゑ法仏ゑ　松ゑと　沙鷗

大竹を植る　拾ふや角屋敷　月底

白象手懸まあ　乙訓の　重　應汀

見不の方きまもあ　沢　桔屋　美濃　草人

蝶ゑの　鼠　ゆゑ　月　秋　千阿

故一ゆゑ　仏の　秋風　字　野の　尾張　鹿野

菜待や　唯一ゆゑの　苔の　面　葛井

孫人ハ　何ゆ　石　ゆゑ　沢　黄山

高象　踏ゑ　歩　仏　家　雲　一　桃蹊

夏　咲ゑ　風　拾　滝の　簑の　家　求巳

山平　蝶ゑ　記　除　も　ゆ　ゑ　梅間

白妙や猶高き堂の中　三河　秋拳

雲いよきし猶よ乳切井の鶴　卓池

苣の根の穴くらくらし彼岸迄　江戸　巣兆

ちと短き花い咲り草くさ　燕布

芭蕉忘や菴へ掩ひ炭　佳　桑蛾

待星の裾よ亜たや貸小袖　路川

猶もちつきし新や芒　州　三巴

蕚の余根い早く小面降　夫山

仰とふく鼓草は似る蔵ふ　吾仆

苟菜もや刈と芽を吹奈ふ　淋山

阿房とい注子いるん茅　葉　國村

水鶏ゐもうと角かまし世あれ　陸奥　雄湖

ちる花い酒の酔るは似る子　文卿

涼ひゝ神の鱠先を焚　男　買月

松風よ蘇きをほく稼す郎　仆岱

雲いふふ山の冬なり麦の稼　南祖

山の井手樋の碎ける　友市　谷水

る借や秋い　地の時　妻　河月

宮城野やうきぬる秋の萩　子孝

蔓ゝ地へ拓くもろく蔓る　白成

麦の秋ぬくく生ゝる湖の遠　世竹

改先て蓼原枝なきし柳の影　旧人

花もなき別るやうし猫の恋　曰人

蜂のゝの蔓ゝ橋の朝　京　江戸　成義

山の海めいたる秋のあきひ　木海

三日月ゝおさ海ゝのあきふ京ゝ　毛久之

夏後の蟬京の水を忘ゝ　画牛

賜の郵海くまゝ　守静

納の蝶　金蓑の下ゝ小まゝ　一澄

賀年あてもつゝ忘ゝ　文　夜　一瓢

思ふ京をそつさあ組の海ゝ　一峰

行原西足もくあく雲とゝ　陰夾　湖雲

奥そこなうの浮ミ　夏の海　物白
雲を流し流して雲雀空　浦人
咲梅ところまさりぬ新の良　有是
松作の高く皆迫る蛍火　涼堂
肥を撰ま枝窠中芹菜　菓便
顧いくら聊月雫より星　如陸
宝ものしらさんなくて名本立　晋栽
二ツ三ツ咲るから滅の新蕨　江戸　道彦

燕来て故郷つかるもとゆるし　護物
浮草の寄れつくや子の乳　茅外
寒毛のむりく降本号沈弘　麻生
何ら用ありて出る家梅の蕊　五流
巳ら寒に碎て蕊の花楳の花　一惠
時雨寺り蕨よや二月雪ノ旦
投出て不度乳あり無稼　奥　乙二
子供家先実のりり郭公　百邪

何あるて旅人交を松交を　柳郊
問る　お住さるる子も　躍うゝ　東原
藤ゝ門の柳潜るて　帰りゝ　與人
紀の　なき　なも　ゆふん　蓋ほ　天民
ほくしまし　完う　頃ひて　地に　拾る　蓬松
書　末あり　水あり　任い　まの　山　巣居
永　菴の　小サ、　物の　花よりも　江戸　ら周
頃を　風の　吹の　色　鹿　乃　ゆう　寥松

光るて　長　布　ゆ　子なき　きを　ゆる　奥　冥々
あう　佛　拾て　一日　伏　ゆ　ゆる　秋夫
小男　鹿の　二ツ　ちて　来　家　家　冥也
加良の　橋を　やま　小　お　祐　江戸　素玩
牛　鳴き　風　ゆ　通ゆ　若　家　對竹
人　更年　迷　ゆ　山　ほと　きん　奥　平角
房　竈　や　ゆ　吸　ゆ　ゆ　山の　間　北須
ゆき　ゆ　の　ゆ　る　ゆ　ゆ　家　家　素卿

萩の露玲粉をさして淋しひら　出羽 長翠

夏の低耳風ハ霞より夜の月　素白

鳴除と定めハ月の露気哉　稲九

若鮎に水金振ハ礫なり　三夕

夕立や流ひ出しるつちき鯉　上野 鷺白

名月や能ハ皆人の船　鹿太

独活の芽の紅見えて春の雪　玄々

先ぞやせ菜子ゝ菜の胡蘿菜　下野 まさ岐

春風や吹も返も人のうへ　雄尾

十粉の蝶ゝ子ふ露ふ暮春哉　麦蔵

八九年問ぬ在所を藤の縁　摂 葛三

旅人の月代青き小春の雨　雉啄

蔓草や何處迄延て盡なる　洞々

春の雪一先庵へ庵も几梨　都々羅

古寺や牡丹間より佛生會　下総 素迪

竹の根の折蕾ふ飛胡蝶哉　栗堂

木かくれて猶孫勝し蓮の花　北尼

蓮をあつきうてなはなるかな　至長

夏草も孫の曜やもえきき　常信　碧山

三日月いとゝ絵まさる見るうかな　翠兄

垣内や枯木影ゆ老こゝ訪　柳丸

眺ハ年の歌よ勝り春の山　三古

花の人柳のうけよ泊まるかな　湖中

蓮葉のうゝ寒や京の道元花和尚一會

夕こゝや嫁ゝ蓮の葉三及

蓮ゆえの歌を駿馬原　柳の苔　乃信　太祐

大利根や移もきの嶺とゝ半り　兄直

門ゝや鶏ゝ勝ゝ柳の花　芦月

帳ゝの孫ハ長ゝ小家の水　蒼碌

明やこゝろハ拾ゆ草の家　青岱

ゝ買の来て来柳を嶺ゝ　玄雲

柏葉ゆ葉の孫や秋の雲　只明

秋の山ちくさ〳〵ながらより　森　嫄柯

春高吟まぬ草もあらしの案　安房　都賀

一里松木槿ちるかぜ　京　蒼虬

子ひとりよ家内う起てあやめ　千崖

一番入もしい掛ひぬ〳〵の花　茂雅

笠形い晴ぬる夕アう那　雲雄

雲影や高く〳〵蓮ら咲　近江　芳之

仙ふんて時雨と二月の夜の月　可盈

河内待仮ても萩の枯葉い　宇浮

浮草ろる人を尺ぬ田植山　鳥頂

ふるう皆　芋人麻うり　花の春　春雄

木踏をあくひしらみ　柏華

麻生て場ろ和も格の宿　仙風

傘の京麻すや暮の海　千影

笠の戸よ住い月形も立の傳　二十當

口の人を一葉よ義や岡の松　京　芝九

西の方の天ハ柿き付ル　六書

みゝ寄る人のうれるや村雨の柔　兵成

ひりるの京おもしろや天の川　岱李

秋夜のまゝ枝垂て芋の葉　玉屑

年経い候ものひて庫ゝ哉　大坂　長亦

蓮もやぬるゝ浮草ぬくめ雪　長風

図の氣や二尺ほどを乱花　豊江

夜の梅いろゝ花の尺ほる　春思

吹ちらひく柿の上ノ柿　春人

夕さしの赤降とけて蕨の哉　春哉

見もとゝ多のきゝやく事ゝ哉　蜂友

饅頭て粉ゝ打せん寺良の花　魯隠

若丹と有ても老て仏の外　京　関史

第一把あるを嘆け蕎　空阿

重箱を二家ひてくるる哉　棋價

見しなきロ哉　図螺の蓋あけて　節良

菊の名や奇しき家を慰めん　定雅

家のまいぐりけけり春の月　丈九

這入より赤ふる梅の使うの車　月居

月宮の眼に仏ふる蝉のこゑ　大坂　竹翁

鶯ちらしき雪ふる　むめ　昌　浪南

若狭もあのよこ　渋皮　浮　蛾月

渋柿やいつよりふる蜆賣　まち丸

青柳や水の流るる隅田川　丹頂

京を添て一二里ある雑煮　探雅

俳諧の冨士かすみ五月雨　百堂

約束の蝉振舞や寺の山　米彦

任吉へ行かゆるまこと茅屋　会庫　桐栖

秋の来て縄もひとすの長なり　呉来

蚤蚊やにて泡吹き蚤の虫　蘭芝

初戸出や傘のうちより遠柳　一草

散りしき見へぬ花の雪　大坂　夜来

燒芝や敢之日ハ尺ぐる鳥の足　井眉

象の一歩踏ひて春の雪　河内　禾紀

若葉より向ふ高尺ぐる東山　蓬宇

名月の道化足君かすみ　大坂　奇閑

ちまちち換之せて暮の月　釣翁

八十八歩菊菜の葉の咲るなり　三津人

ひ年来ぬ鶯もあるて沈の仲　安藝　篤老

姉しざに座を置(スヲ)ひ清ちの宗　宇柏

初雪や新のおきあのうく　渡蛇

山乃口明ちく葛ちり新ちの　梅佛

初春の明を引や座の松　陵亮

幕の虫啼年来雀こう郷　路宅

梅咲や人の見ぬ紙の屋敷し　芝雲

氷解の左膝ちきく花ちル　圭雨

夕アとも定沈ちの蕊まちり　凡十

葉ち実ち深や麻のちの皇　極　玄蛙

吉野山桜の蕾とあらはれて　大坂　尺艾

雪の花咲かぬ梅くれなゐ　麦太

時雨の雲のたゝきの鼓を連し　伊勢　椿堂

南風をおろしを急ぎ月夜哉　伯耆中　閑蔵

小夏の影見るや涼しの月　大坂　喜蔵

秋あるしやうる蓼の葉の赤き持　東雨

旅の日の二日暮れ行く雲の外六

順礼の二道なるく薄こゝ雲　出雲　花叔

短歌のこゝろ秋の山の陰　長門　藤庭

夢の夢かゝるや小松山　柳仙

何嘗ぬ影て秋の暮の野　東雲

人こゝ行くゝ暮れ行く角田川　松宇

切鳥の鶯い年寄小夜の郭　古硯

牛代て伝の恋法ふ松乙　羅風

噛て見ん人こゝ寄ぬ秋の菜　豊前　丁国

敷鶴る暮やすの玉あゝ乳　豊後　葵亭

人くもちあり　服を見送るや　春光　（筑後）　文角

雲のうへに　紙漉　なりう　鶯の　車　芦月

三日月を　つけるあり　一雨子　多　軺兆

近江野の　雲小　時雨　間の　雨　雨蘭

屠蘇やまゝ　空なる　秋の　雲　（筑前）　瓢風

落葉をくゝる　屠る　かまの　玉峰

あのよう　あもひ　ひろり　四方寺　石地

為賊　うりの　あるよ　色　塔　柳　（肥前）　為也

鞍風　吾友　祥禾　天外　共映　五風　恕水　大峰

鞍　文　ちいさ　おちこ　ちく　ゆる　ゆる

あつ　しく　と　小松　城　ある　芒の

近つき　に　ゆる　かる　しま　の　山

ぢく　く　と　風　夜　ひて　時　田　堀

清　炭　や　物　意　ぼ　ぢく　ぢる　前

枯　る　の　ち　繰　ん　ん　ん　柳　の　郷

柳　ゝ　る　を　舟　賊　る　宴　の　さ　ひ　ん

ち　ん　ん　も　て　来　柳　の　蓋　ゝ　の　ん

草の葉根なのこゝろこゝ屋敷哉　薩广　青梁

る浪の誘ひ出り冬の舟　琴刎

氣孤なるさゝもの葉かきれりさ　阿波　葦伯

吉野より伯母すゝかの枯かゝら　越後　尤琴

負行や萩よゝ怪き秋の衣　年眉

小萩や天北川まで咲ぬき　五芳

湯紙のちきれ〳〵や秋の雲　路丈

人よかせて墨深くさき火桶哉　桃止

松の花実のなれ法も取もあ　耳雨

川岸ゝ欠くゝやくなり月　鳳阿

松ゝの夕陸ゝもきる孔雀哉　遠嘯

花墨窠乃家ゝ函の降ゝり　奥　潤九

杉ゝゝる焚火さ雨苔の集安寂　之醒

行〳〵る笠ゝ祭　楠〳〵　時盛　史方

水ゝゝゝゝ行〳〵さめり墨窠紙　可今

笠の塔年さいてもゝゝる蓮　二松

見もしらぬ人とて人丸に似なき義仙　立邦

五六丁月出て殘る蛍の舞　呂仲

都出時や月出の汐たるみ　楚吟

起ふしの数よ来なりまの風　有夕

立帷や思ふ旅宿の解けに　住丸

涼しさや人麻呂起を菴の常　一義

ふるさとの汝分とな舟を寄せ　雨沾

見れば坂の門をすかる五月うふ　梨青

[illegible]て高きすのも十日松　三枝

夏帷子佳みふり三日の月　露菊

雲の歯くきも今ぬ君来仙　白阿

傘を馬ふ[illegible]り秋の風　越中　奥心

漣のうけて草に花をもり　正岱

鶏鳴の曲て吹出す嵐の野　方三

巫とりて新もちぬや年角力　白年

ふた人丸に一主撫て花の雲　加賀　眉山

歩行よんで歩行新年の麻　鹿古

窓ハ日の入際よ蓑をこの海　梅人

山の井の水汲よ来て蓮の花　耳谷

降るき次之千鳥よ灯ともる　蕉淳　儲史

行春の数像祝く小鴨ル　元々

竹取の志をうよ摘や花菖　東有

ふらくと昼もあくて美の面　十寸影

名月や面も五級の浦けしき　一尤

行年を志ゝ月見の宿のうち　越後　何尺

家結ふ木草のうも七日の数　呉郭

晴るも雪ふも衣ぬれこの家　竹里

茂よ茂て蓉の世話の思ハる　喜年

木雑校

人性善多る事をめて交ハ
あ〳〵しく元と性善保れる
ものあハれなる無事なり
て至性むなしきもの婦
弱を哀れとへくもの程なの
つゝ世情ふ通達なるもの
彼らをもしるもの命し仍
素朴にして拙むく物を愛れる

業平みをを[illegible]
たまし[illegible]
はきめぬ涙を[illegible]
[illegible]
毫とは[illegible]
[illegible]
て世程を[illegible]
とのたつを[illegible]
[illegible]

[illegible]
を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
業平[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

をあ〻ぬ、京弘ものもはをて
京極ふ弘しかすなるあるの
なをうさとるをはくとも
引せ〻絶〻ることまさしく
古世の風流さて
そ弘世毛よ到る文祈猪う
世のはつなれやすく墨を
のこおもてをあ〻めて、いくき
やつた〻ふ世ふるみるもい

ふせ〻をみちの系なる〻さか
附百弘保そ世はこ〻を文
と弘世はこそ正風弘を法
こ弘と毛中ち絶系世弘
世弘弘毛と文亦しの文
さ〻ふ〻絶やさ〻れと
あ毛を保とを法と仕立
る保〻ふ毛ま毛ち毛月ふも
な我法か我川の水くさ毛

うつをなを死法玉まつりいな
ら鬼神を感をきめるむいと
おのつのなし　古人士朗居士
三経を法を物を引立人と出
下　雑談をれ名やく
法人　毎下ま延宣を和法
俳諧をとまして　古雅法
本をを右の　右の　其
あるの古学角をさ手

かふる人物なりさ保と法不
学怪者まて世代翁法俳
諧を好む所のあきる
なりと云さされたてをこの要
法を以来那多及ふまて世保
経ふる年なのりおの友人
聚を世ら法りか法居士法活
を法をきるも法のあなの地
そ法を法行をうて法

集まるこゝに程こ副て
あるゝ孔雀を捨あつむこれや
見もまた孔雀の業ちゝ
をてつる百ゝむ花は目を悦
さて花者の業もまゝ産る
産生成亟ものゝをさゝ泥ひ
あるゝさゝむるあゝぬそ
の

文化九年孟秋八

雪湖　若人浚

京寺丁二条

井筒屋庄兵衛

橘屋治兵衛

蕉門書肆

信陽松府世話所

村山傳吉

蔵書